

田口 茂樹

(京都ノートルダム女子大学)

黒田 悠華

(京都ノートルダム女子大学 国際言語文化学部)

概要：本稿では、等位接続された連体修飾構造の後続節内で主語の「ガ・ノ」交替が適用し、その述語部分が省略された結果残留する「ノ」について考察する。単純名詞句同士の等位接続では、後続句内において残留した「ノ」は代名詞と解釈されうるのに対し、等位接続節の後続節においては、その「ノ」を代名詞として解釈することが不可能である点に着目する。省略が適用した連体修飾節が項である場合とそうでない場合とを区別し、属格付与に関わるメカニズムの定式化を行う。これを踏まえ、後続節で残留する「ノ」が、代名詞ではなく属格の格助詞であることを主張する。DP 認可分析による属格主語の認可システムを援用して派生プロセスの説明を試み、「ハ」残留省略構文との関連において本稿での分析の妥当性を立証する。これを基に Lobeck の一般化の再定義を提案し、更にはカートグラフィー理論の視点を取り入れた情報構造の研究と本稿の分析との接点を示唆する。

1. はじめに

本稿では、(1)にみられる一般的な「ガ・ノ」交替が、等位接続節構造に現れる場合の「ノ」の統語的地位と意味解釈について論じる。

(1) 太郎ガ／ノ 書いた 本ハ 面白い。

以下の(2)a は、(1)の先行節とそれに対応する内容を表す後続節が、逆接の接続助詞によって等位に並列されたものである。したがって、後続する節においては、先行する節の統語的、意味的情報に基づいて統語操作及び意味解釈が行われることが予測される。(2)b では、(2)a における「本」に対して代名詞化が適用しており、(2)a とほぼ同等の意味解釈が可能である。他方(2)c では、「ノ」を残して「書いた」という述語部分が省略されている¹。

- (2) a. 太郎ガ／ノ 書いた 本ハ 面白いが、花子ガ／ノ 書いた 本ハ 面白くない。
 b. 太郎ガ／ノ 書いた 本ハ 面白いが、花子ガ／ノ 書いた ノハ 面白くない。
 c. 太郎ガ／ノ 書いた 本ハ 面白いが、花子ノハ 面白くない。

等位接続構造における「ノ」は、単純名詞句の場合、代名詞として解釈することが可能である (Saito & Murasugi (1990)、Saito, Lin, & Murasugi (2008)、宮本 (2016) 他参照)。以下の(3)において、後続節における「花子ノ」が、主格の「ガ」と共起して主語となっている事実から考えても、これを代名詞として分析するのは自然であろう²。

(3) 太郎ノ 本ハ 面白いのに、花子 ノガ 面白くない わけがない。

以下、連体修飾節が等位接続構節内に現れ、後続節内で省略が適用した後に残余する「ノ」が、代名詞

* 本稿は、黒田(2022年提出予定)による京都ノートルダム女子大学学士論文の草稿に基づき、JSPS 科研費 JP19K13158 の助成を受けて行われている研究課題の分析を部分的に取り入れたものである。

¹ ここで言う「省略」については、削除或いは空代名詞化による非音形化操作等が考えられる。本稿では、省略された部分が被修飾語の名詞句である点のみが問題であるため、派生のプロセスについては深く追究しない。

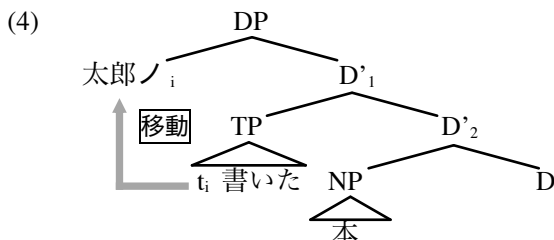
² (3)における「ガ」については、総記の解釈も可能であるが、ここでの議論と直接的な関連が無いため、便宜的に主格の格助詞として扱う。

ではなく属格の格助詞であることを主張する。第2節では、「ガ・ノ」交替に関する分析の先行研として、Harada (1971)に端を発する DP 認可分析と、Hiraiwa (2001, 2005)他による C-T 一致分析を紹介する。第3節では、C-T 一致分析で扱われている「ガ・ノ」交替のデータと、本稿で扱う「ガ・ノ」交替のデータとが本質的に異なることを指摘する。これに伴い、項の名詞句内で現れる主語名詞句の「ノ」と、そうでない名詞句の中で現れる「ノ」は、別の統語環境及びメカニズムによって派生されることを前提とする。これを踏まえて経験的なデータを提示し、残留した「ノ」が代名詞ではなく、属格の格助詞であることが裏付けられることを見る。理論的な観点からは、本稿でのデータを基に Lobeck の一般化をフェイズ理論に適合させて再定義する可能性に言及する (Chomsky (2001)他参照)。第4節では、結語に加え、本稿での提案を単純名詞句の等位接続構造の分析へと拡張する試みに言及する。また、「ガ・ノ」交替とフォーカスとの共起制限に触れ (三原 (2022))、カートグラフィー理論における談話上の階層構造と格標示メカニズムとの接点についての示唆を行う (遠藤 (2014) 他参照)。

2. 先行研究：DP 認可分析と C-T 一致分析

本節では、生成統語論の中で、「ガ・ノ」交替における属格の「ノ」付与に対して主流となっている 2 つの分析を概観する³。1つは連体修飾節を支配している DP によって「ノ」が付与されるとする、Harada (1971)に始まる分析である。もう一つは、「ガ・ノ」交替においては DP による認可は必要なく、空補文標識と時制辞との一致によって具現された連体形が連体修飾節内の主語に「ノ」を付与する、という Hiraiwa (2001, 2005)に端を発する分析である。

管見によれば、生成統語論の枠組で「ガ・ノ」交替が連体修飾節内で適用することについて詳細に論じたのは Harada (1971)が最初である。そして、Harada の観察を、ミニマリスト・プログラムの枠組でより理論的に発展させたのが Miyagawa (1993)による DP 認可分析であると言ってよい。(4)の略図で示したとおり、Miyagawa は連体修飾節内の主語が、DP の指定部に移動することで属格の付与を受けるとした⁴。



この分析について特筆すべきは、同じ連体修飾節における主語でありながら、主格主語よりも属格主語の方が構造的に高い位置を占めるという点である。Miyagawa (1993)を含め、その後 DP 認可分析を裏付けるデータが数多く提示されることとなる (越智 (2016) 他参照)。

DP 認可分析に対し、属格付与に関して被修飾語 DP の必然性に疑問を投げかけたのが Hiraiwa (2001, 2005)他である。Hiraiwa は、(5)のような例に着目し、属格主語が現れる連体修飾節は必ずしも DP による認可を必要としないと結論づけた。

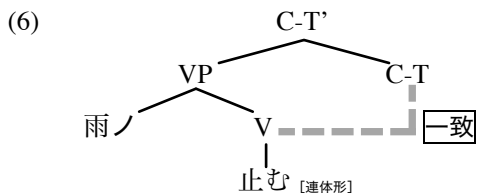
(5) 太郎ハ 雨ノ 止むマデ 家ニ いた。

(5)のような例に対して Hiraiwa が提案したのは、Chomsky (2000)他で提案された一致操作に基づく分析で

³ 本稿では、いずれの分析方法を採るかにかかわらず、属格標示一般を指す場合には、「付与」という用語を用いる。被修飾語 DP に重きを置く Harada タイプの属格付与を「認可」、被修飾語 DP は必ずしも必要ないとする Hiraiwa タイプの属格付与を「一致」として区別する。

⁴ Miyagawa (1993)では「主要部・指定部の一致」が想定されているが、ここでは Chomsky (2000)以降における Agree との混同を避けるため、「認可」と呼ぶことにする。

ある。本稿ではこれを C-T 一致分析と呼ぶ。この分析では、時制辞の T と補文標識の C が複合体を形成し、それが動詞と一致関係に入ることによって連体形を生み出す。言い換えれば、被修飾語の主要部名詞句は無くとも、節全体が名詞性を帯びることによって主語に属格を付与する、ということになる。



次節では、DP 認可分析の立場から、「ガ・ノ」交替が等位接続構造に現れ、後続節内で述語部分が省略された場合の意味解釈について議論する。

3. 等位接続節における「ノ」

本節での目的は、連体修飾節とその被修飾名詞句が、紛れもない項として出現している統語環境に絞って、「ガ・ノ」交替が適用するプロセスを分析する点にある。第 2 節で導入した DP 認可分析と C-T 一致分析の妥当性を比較したり、優劣を論じたりするものではなく、あくまで両者が扱う「ガ・ノ」交替が、似て非なる別の統語現象であるという立場を採る。したがって、(5)のような非項における「ガ・ノ」交替が C-T 一致によって具現される、という分析を批判するものではないという点に留意されたい。ここでの議論は、「ノ」のみの残留が許される(2)c のような現象に考察対象を限定し、それが許されない(7)のような例に関する議論は期を改めることとする。

(7) 太郎ハ 雨ノ 止むマデ 家ニ いたが、花子ハ 風ノ * (止む) マデ 学校ニ いた。

また、本稿では、(8)にみられる「という」のような補文標識類が具現されない限り、連体修飾節が TP であると想定する (Murasugi (1991)他参照)。

(8) 太郎ガ 書いた という 本ハ 面白い。

本稿で最も重要なデータが、(9)a と(9)b の対照である。単純名詞句同士が等位接続された(9)a と、連体修飾節で修飾された名詞句が等位接続された(9)b における「花子ノ」の解釈が異なる点に焦点を当て、「ノ」の統語的地位を検証していく。具体的には、(9)a では「本が花子の所有物である」と解釈されるのに対し、(9)b (=2)c では「花子が本の著者である」という解釈しか許容されないという観察を中心に据える。(9)b において、「本が花子の所有物である」という解釈は不可能である。

(9) a. 太郎ノ 本ハ 面白いが、花子ノハ 面白くない。

b. 太郎ガノ 書いた 本ハ 面白いが、花子ノハ 面白くない。 = (2)c

被修飾語 DP における名詞句の「本」が具象名詞であることから、原理的には「花子ノ」の「ノ」を代名詞として解釈することが可能であると予測される (宮本 (2016) 他参照) もう 1 つの可能性として考えられるのは、この「ノ」が、(9)b の等位構造における先行節の主語、即ち「太郎ノ」に付与された属格と同様の派生を経て認可された格助詞である、とするものである。もしこの分析が正しいとすれば、(9)b の後続節内で省略されているのは述語を含む代名詞の方であり、先行節で適用している「ガ・ノ」交替が許容されないという結果が観察されるはずである。

⁵ 「ガ・ノ」交替に関する項・付加部の非対称性については Fujita (1988)他参照。

(10) 太郎ガ／ノ 書いた 本ハ 面白いが、花子*ガ／ノハ 面白くない。

(10)の後続節において主格主語の「花子ガ」が許されない原因の説明として、ここでは2つの選択肢を検討する。1つ目は、日本語では格助詞「ガ」や「ヲ」の残留が許されない点に着目するものである。例えば、(11)aから(11)b、(12)aから(12)bのように分裂文を派生した場合、「ガ」や「ヲ」が残留した節の末尾に断定の助動詞「だ」を添加して文を完結させることはできない。

- (11) a. 花子ガ 書いた 本ハ 面白い。
 b. 書いた 本ガ 面白いノハ 花子 (*ガ) だ。

- (12) a. 花子ガ 本ヲ 書いた。
 b. 花子ガ 書いたノハ 本 (*ヲ) だ。

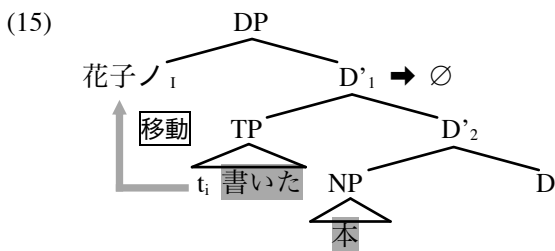
つまり、「ガ」や「ヲ」とは異なり、「ノ」の残留は許される、という単なる記述的一般化を行うに留めておくという選択である。しかし、この立場を採った場合、総記或いはフォーカスの「ガ」((13)参照)や経路等を表す対格副詞の「ヲ」((14)参照)といった、格素性以外の解釈可能な素性を含む助詞も考慮に入れなければならない。

- (13) A. 花子ガ 本ヲ 書いたらしいよ？
 B. えっ、花子 (*ガ) ですか？

- (14) a. *花子ガ 犬ヲ 浜辺ヲ 散歩させた。
 b. (??)花子ガ 犬ヲ 散歩させたノハ 浜辺 (ヲ) だ。⁶

したがって、「ガ」や「ヲ」とは別に、「ノ」の残留のみが許されるという言語事実を理論的に説明できる分析が望ましいと言える。ここでは2つ目の選択肢を追究し、属格主語が移動してその先のDP指定部において認可を受けるという、Miyagawaの分析を援用した統語的分析を行う。具体的には、移動と省略の相互作用が、(10)に見る「ガ・ノ」交替の非対称性を生み出すプロセスを考察する。

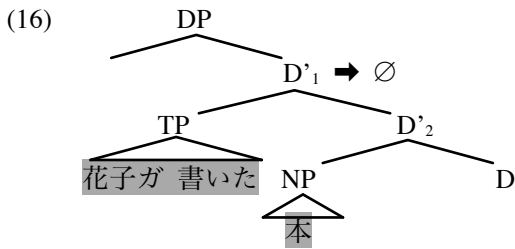
第2節において提示した(4)を基に、(9)b (= (2)c)における後続節の派生を図示したのが(15)である。Miyagawaに従えば、連体修飾節の属格主語がDP指定部へ移動するということになる。(9)b (= (2)c)は、(15)の構造に対してD'1の省略が適用した結果と捉えるのが妥当であろう。その結果、グレーでハイライトされた部分は音形化されず、「花子ノ」のみが音声的にスペルアウトされる。



ここで再び疑問に上がるのは、(10)の非対称性、即ちなぜ後続節において属格主語が許容され、主格主語が許容されないのか、という問題である。この問いに対しては、Miyagawaの移動分析が有効である。上で示したように、Miyagawaは、DP指定部への移動を経て格素性の照合を受ける属格主語が、TP指定部に留まって格素性の照合を受ける主格主語よりも構造的に上位にあると述べている。したがって、後続節

⁶ Kuroda (1978)は(14)bのような例を容認可能としているが、発表者を含め多くの日本語話者にとっては、(14)aと同様容認不可能なようである。ただし、ごく少数ながら、(14)bに若干の改善を認める話者も存在したことから、ここでは(??)を付している。

において属格主語が含まれる(15)に対し、主格主語が現れる構造は(16)だということになる。分析の一貫性を鑑みると、省略に関しては、(15)、(16)ともに D'₁ が対象であると考えられるべきであろう。この結果、(16)において、「花子が」が音形を持ってスペルアウトされることが許されないという事実が説明できる。



では、(10)の後続節のみが(16)から派生された結果生成される文の適格性はどうか。以上の分析によると、得られる文は(17)a となり、それは(17)b のように派生したものだということになる。

- (17) a. (*)ハ 面白い。
 b. [DP [D'₁ 花子が書いた [D'₂ 本]]]ハ 面白い

(17)a は、単独で提示された場合には非適格だと判定されるであろう。しかし、(18)A のような文脈を与えた場合、「花子ノ」を省略した(18)B を適格文と判断する話者が多いようである。

- (18) A. 太郎ノ 書いた 本ハ 面白い (ね)。花子ノハ どう？
 B. ... ハ 面白い (よ)。

(18)B は、Sato (2012)他で議論されている「ハ」残留省略構文と同等とみなすことができる。Sato (2012) は、カートグラフィー理論の観点から、(16)における DP が TopP 指定部に位置しており、その指定部を音形的にスペルアウトするか否かは随意的だとしている。この主張が妥当であれば、(18)B が適格文と判定される事実に対して理論的な説明が与えられると言ってよいだろう。要するに、TopP 指定部がスペルアウトされた場合には(10)のように「花子ノハ」が音形化されるのに対し、TopP 指定部がスペルアウトされなかった場合には(18)B のように「ハ」のみが音形化される、というように、2 種類の構文が並行的に派生しているということである⁷。

更に追究すべき問題として、D'₁ が省略の対象となる必然性が挙げられる。事実として、(16)において D'₁ を省略した場合、述語の「書いた」が残留して(19)のような非適格文が派生される。これに対する理論的な説明として、以下に試案を提示する。

- (19) *太郎ガ／ノ 書いた 本ハ 面白いが、花子ノ 書いた ハ面白い。

端的に言えば、いわゆる Lobeck (1990)の一般化を、フェイズ理論に照らし合わせて再定義するという提案である。Lobeck の一般化は、概略すると「X バー構造における補部 YP の省略は、XP の指定部が具現された場合にのみ適用可能である」とするものであった。これを基に(15)と(16)を再度見てみると、音形化されないのは NP「本」のみということになり、(19)を排除することができない。そこで、Chomsky (2008)以降想定されているフェイズ理論で Lobeck の一般化を再定義してみる。Chomsky (2008)のモデルでは、フェイズの左端はいわば特権的地位にあり、スペルアウトの適用後も残存して上位のフェイズにおける統

⁷ (18)B は、結果として「ハ」残留省略構文の形を取るものの、本稿で提案している派生が Sato (2012)の分析に対する代案とはならない点に注意が必要である。Sato の分析はトピック化における DP の省略を対象としたものであるが、本稿の分析ではそういった文脈設定を行っていない。したがって、トピック化以外の文脈で D'₁ の省略が適用された非適格文を過剰生成する恐れがある。この問題は、トピック化をはじめ、談話や情報構造といった要因を考慮に入れた上で今後検討すべき重要な課題である。

語操作に参加することができる。これを基に、「X ̄構造における省略は、指定部以外の全てに適用しなければならない」と再定義することを提案する。この定義で重要なのは、最上位の X'以下が省略の対象となる点、Lobeck が課した「XP の指定部が具現された場合」という条件に言及していない点である。この結果、(15)におい D'₁が省略された場合には(9)b(=(2)c)、(16)において D'₁が省略された場合には(18)B が派生できることが保証される。

フェイズ内におけるスペルアウトに関して、指定部具現の条件が必須であるか否かは定かではない。少なくとも本稿ではその経験的な証拠が提示できていないことから、この問題に関しては今後更なる検証が必要となる。

4. 結びと帰結

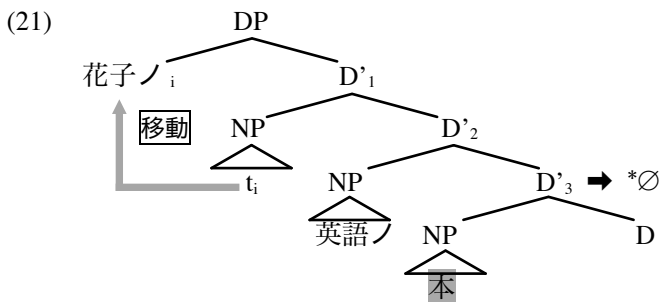
本節では、結びに加え、本稿での分析が関連する他の統語事象に応用できる可能性を示唆する。

本稿では、「ガ・ノ交替」が等位接続された連体修飾節内に現れ、その後統節内で述語部分の省略が適用した結果残留する「ノ」が、属格の格助詞であることを主張した。省略の結果派生された文の意味解釈から、DP 認可分析を軸に「ガ」と「ノ」の分布を分析し、Lobeck の一般化をフェイズ理論に照らし合わせて再定義することを示唆した。最後に、本稿での提案が、その他関連する統語事象に対する説明と適合するか否かを検証して結びに代えたい。

1つ目として、上で見た DP 認可分析が、単純名詞句の等位接続構造にも有効であるかどうか考察する。発表者が行ったインタビューによると、(20)A の疑問文に対する(20)B の回答は非適格であると判断する話者が多数であった。

- (20) A. 誰ノ 何ノ 本ガ 面白いの?
 B. 花子ノ 英語ノ * (本) だよ。

フェイズ理論に照らし合わせて再定義した Lobeck の一般化を用いた場合、(20)B の非文法性はどのように説明されるであろうか。その派生を図示すると、(21)のようになる。



上に見た通り、再定義した Lobeck の一般化では、D'₁が省略されなければならない。(21)は、これが遵守されず、D'₃が省略されたことを示している。この場合、音形上「本」のみが省略された(20)B に見る回答が非適格であることが理論的に正しく説明できる。

もう一つは、本稿で分析対象とした「ガ・ノ」交替においては、属格名詞句に「サエ」などを添加してフォーカス化することができないという言語事実である(三原(2022)、遠藤(2014) 他参照)。(22)a、(22)b に見るとおり、属格名詞句がフォーカスとなれないのは、連体修飾節と単純名詞句に共通である。

- (22) a. *太郎サエガ/*ノ 書いた 本
 b. *太郎サエノ 本

想起されたいのは、本稿では(22)のタイプの「ガ・ノ」交替では CP が投射しないという立場を採ってい

る点である。カートグラフィー理論では、フォーカスやトピックといった談話等に関する情報は、CPを精緻化した階層構造によって認可されると考えられている。(22)bは言うに及ばず、(22)bにおいてもCPが投射しないという仮説が正しければ、当然フォーカスを認可するFocPも投射せず、(22)bの非文法性を正しく予測することができる⁸。

以上、帰結として提示した2種類の統語事象と矛盾しない点を勘案すると、本稿での提案は一定の妥当性があるものと考えられる。

参考文献

- Chomsky, N. (2000). Minimalist inquiries, in R. Martin, D. Michaels & J. Uriagereka (Eds.) *Step by step: Essays on minimalist syntax in honor of Howard Lasnik*. (pp. 89–155). Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, N. (2001). Derivation by phase, in M. Kenstowicz (Ed.), *Ken Hale: A life in language*. (pp. 1–52). Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, N. (2008). On phases. In R. Freidin, C. P. Otero, & M. L. Zubizarreta (Eds.) *Foundational issues in linguistic theory*. (pp. 133–166). Cambridge: MIT Press.
- 遠藤 喜雄. (2014). 『日本語カートグラフィー序説』. 東京: ひつじ書房.
- Fujita, N. 1988. Genitive subject in Japanese and universal grammars. [Master thesis, Ohio State University].
- Harada, S-I. (1971). Ga-No conversion and idiolectal variations in Japanese. *Gengokenkyu*, 60, (pp. 25-38).
- Hiraiwa, K. (2001). On nominative-genitive conversion. In E Guerzoni and O Matushansky (Eds.) *A Few from Building E39, MIT Working Papers in Linguistics 39*. (pp. 65-123). Cambridge, MA: MITWPL.
- Hiraiwa, K. (2005). *Dimension of Symmetry in Syntax: Agreement and Clausal Architecture*. [Doctoral dissertation, Massachusetts Institute of Technology].
- Kuroda, S.-Y. (1978). Case-marking, canonical sentence patterns, and Counter-Equi in Japanese. In J. Hinds & I. Howard (Eds.) *Problems in Japanese syntax and semantics*. (pp. 30–51). Tokyo: Kaitakusha.
- Lobeck, A. (1990). Functional Heads as Proper Governors. *Proceedings of the Northeast Linguistics Society*, 20, (pp. 348–362).
- Longobardi, G. (2001). The structure of DPs: Some principles, parameters, and problems', in M. Baltin & C. Collins (Eds.) *The Handbook of Contemporary Syntactic Theory*, pp. 562–603). Oxford: Blackwell.
- Maki, H., & Uchibori, A. (2008). *Ga/No conversion*. In S. Miyagawa & M. Saito (Eds.) *The Oxford Handbook of Japanese Linguistics*. (pp. 192-126). New York: Oxford University Press.
- 三原 健一. (2022). 「いわゆるガ・ノ可変と提示機能」, 『京都ノートルダム女子大学研究紀要』, 52, (pp. 69-80).
- Miyagawa, S. (1993). Case-checking and minimal link condition. C. Phillips (Ed.) *MIT Working Papers in Linguistics, 19: Papers on Case and Agreement II*. (pp. 213-254). Cambridge, MA.: MITWPL.
- 宮本 陽一. (2016). 「名詞句内の省略」, 村杉恵子・斎藤衛・宮本陽一・瀧田健介(編), 『日本語文法ハンドブック: 言語理論と言語獲得の観点から』, (pp. 265-298). 東京: 開拓社.
- Murasugi, K. (1991). *Noun phrases in Japanese and English: A study in syntax, learnability and acquisition*. [Doctoral dissertation, University of Connecticut].
- 越智 正男. (2016). 「名詞修飾節における格の交替現象」, 村杉恵子・斎藤衛・宮本陽一・瀧田健介(編), 『日本語文法ハンドブック: 言語理論と言語獲得の観点から』, (pp. 146-188). 東京: 開拓社.
- Saito, M., & Murasugi, K. (1990). N'-ellipsis in Japanese: A preliminary study. *Japanese/Korean Linguistics, 1*, (pp. 258–301).
- Saito, M, Lin, T-H. J., & Murasugi K. (2008). N'-ellipsis and the structure of noun phrases in Chinese and Japanese. *Journal of East Asian Linguistics, 17*, (pp. 247–271).
- Sato, Y. (2012). Particle-Stranding Ellipsis in Japanese, Phase Theory, and the Privilege of the Root. *Linguistic Inquiry, 43-3*, (pp. 495-504).
- Watanabe, A. (2006). Functional projections of nominals in Japanese: Syntax of classifiers. *Natural Language & Linguistic Theory, 24*, (pp. 241–306).

⁸ 遠藤 (2014) は、旧情報を表す属格主語と、新情報を表すフォーカスとが談話上適合しないという分析に言及している。また、三原 (2022) では、DP領域にもFocPの階層が存在する可能性を示唆している。今後、名詞のタイプに応じてDPを分類し、その内部の階層構造をカートグラフィー理論の観点から分析する研究が盛んになると考えられる (Longobardi (2001)、Watanabe (2006)他参照)。紙幅の都合上本稿では立ち入らないが、今後の研究課題として非常に興味深いテーマである。